

武藏野日曜集会

カナの婚宴

——ヨハネ伝第2章1～11節——

小池辰雄

1994年3月13日

わが時 無の時 キリストから与えられた無の世界 無からの創造 十字架・聖霊の場 主さまに圧倒されて生きる者

【ヨハネ2・1～11】

¹三日めにガリラヤのカナに婚礼ありて、イエスの母そこに居り、²イエスも弟子たちと共に婚礼に招かれ給う。³葡萄酒つきたれば、母、イエスに言う『かれらに葡萄酒なし』⁴イエス言い給う『おんなよ、我と汝となにの関係あらんや、我が時は未だ来らず』⁵母、僕どもに『何にても其の命する如くせよ』と言いおく。⁶彼處にユダヤ人の潔の例にしたがいて四五斗入りの石甕六個ならべあり。⁷イエス僕に『水を甕に満せ』といい給えば、口まで満す。⁸また言い給う『いま汲み取りて饗宴長に持ちゆけ』すなわち持ちゆけり。⁹饗宴長、葡萄酒になりたる水を嘗めて、その何處より來りしかを知らざれば（水を汲みし僕どもは知れり）新郎を呼びて言う、¹⁰『おおよそ人は先ずよき葡萄酒を出し、醉のまわる頃おい劣れるものを出すに、汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり』¹¹イエス此の第一の徵をガリラヤのカナにて行い、その栄光を顕し給いたれば、弟子たち彼を信じたり。

●わが時

前には、ピリ・ボとナタナエルのことがありました。それから数えて三日目ということです。

¹三日めにガリラヤのカナに婚礼ありて、イエスの母そこに居り、

ガリラヤの西の方にナザレという寒村がある。ナザレの東北⁵マイル位にあるのがこの「カナ」という村です。そこで婚礼があつた。姻戚でもないでしようけれども、何か関係が深かつたらしい。

²イエスも弟子たちと共に婚礼に招かれ給う。³葡萄酒つきたれば、母、イエスに言う『かれらに葡萄酒なし』

「何かイエスはなさる」ということはお母さんも信じていたから、こういうことを特に言わされたわけです。



⁴イエス言い給う『おんなよ、我と汝となにの関係あらんや、我が時は未だ
来らず』

こういう答えが非常に我々に「どういうことだ？」と疑問をもたせる。

「我と汝となにの関係あらんや」

という。これはお母さんですからね、関係が無いどころではない。ところが、キリストは、こと神の現実、神の真理となると、この世的な相対的な関係なんていうものは問題にしない。これが「何の関係あらんや」ということ。

「私の関係あるのは神さまとの関係なんだ、それが本当の関係なんだ」と。こういうところが非常にはつきりしている。我々普通のクリスチヤンにはなかなかこれが言えない。相手がお母さんであろうが、兄弟であろうが、親戚であろうが、友人であろうが、この世的な関係は問題でない。

「私がお前の足を洗わなければ、お前との関係はないんだ」

と、キリストはペテロにそう言われた。

「あなたが私の足なんかを洗うなんてもつたいない」

とペテロが言つたら、

「冗談じゃない。お前の足を洗うのは、ここがお前との関係だから」

と。キリストの関係は足を洗うという一つの行為において罪を洗い清める。それがキリストの意でしたから。それがペテロには分からぬ。これも同じことです。我々はこの相対的現実でこの世でいろいろな人と関わっていますが、いざとなると、その関わりを問題にしないところのはつきりした態度がでなければ、キリストの僕ではないということになるわけです。この世的な非礼が非礼であつても仕方がない。

「女よ、我と汝となにの関係あらんや」

キリストのこの答えにおいて我々はそういうことを学ばなくてはならないわけです。

「我が時は未だ来らず」

キリストの「時」というのは神さまとの関係における時なんです。我々の時もそういう時でないといかん。我々のクリスチヤンとしての時というのは質的には永遠をバックにしている時なんです。どういう仕事をしていても、そういう時の自覚をもたないと、この世の相対的現実に支配されてしまう。相対的現実に支配されはダメだ。現実を逆に支配しないとね。逆に支配する立場にあると、本当の意味において相対的現実を一番正しく現ずることができる人になるわけです。

「我と汝となにの関係あらんや」は、ギリシア語でいうと、

「ティ エモイ カイ ソイ」

「何だ？ 私とお前とは」

という言い方で、「関わりあらんや」という言葉はないわけです。「我が時」は「ヘー ホー



ラムー」と書いてある。わが時期、天の時です。

●無の時

葡萄酒がなくなつたので、

⁵母、僕どもに『何にても其の命ずる如くせよ』と言いおく。
とにかく、お母さんもキリストにはかなわないですから。

⁶彼處にユダヤ人の潔の例にしたがいて四五斗入りの石甕六個ならべあり。

食事の前にも後にもちゃんと手足を洗う。それが「潔」ということ。

⁷イエス僕に『水を甕に満せ』といい給えば、口まで満す。

キリストはその時が来たものだから、こう言われた。こういう「時」というのはドイツ語でいうと「ツアイト・ブンクト」「時点」です。ある時点、瞬間なんです。それはどういう時かというと、無の時なんです。絶している時です。行き詰まつてどうにもならない時が一番大事な時なんです。我々は普通のいろいろなことでも、

「どうも行き詰まつてしまつてどうにもならない、思案してもどうにもならない」

という、そういう行き詰まつてどうにもならない時が大事な時なんです。どうだこうだと考えあぐねて展開していくようなことではダメだ。どうにもならないという時が大事な時なんだ。そのどうにもならないのが、この無の時点です。

「我は何事をも為し能わず、父これを為さしめ給うなり」

「自分ではどうにもならない、何もできない」

と、キリストははつきりそいつている。

「我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、
それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」（ヨ
ハネ5・30）

「自分で何もできない」と言つてはいる。この「わが時」というのは7章にもある。

「ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。世は汝らを憎むこと能わねど我を憎む、我は世の所作の悪しきを証すればなり。なんじら祭に上れ、わが時いまだ満たねば、我は今この祭にのぼらず』」（ヨ
ハネ7・6～8）

キリストは自分の時もなければ、業もなければ、教えもできない。

「イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。』」（ヨハネ7・16）

とある。だから、私は

「キリストは無者である」

と言つてはいる。キリストは何もないんだ。キリストというのは時でいうと無の時点に居る。



業のうえでも何もできないのだから無能なんだ。一切は神さまからやつてくる。だから、キリストのことを無者と言っている。我々も無者で、キリストから一切をいただくという無なんだ。

●キリストから与えられた無の世界

時間でいうと無もあるし、場所でいつても無だ。時間的にも場所的にも無なんだ。「ここに」というのは本当の意味では無なんだ。行き詰まりでどうにもならないという時点が、この無というのが、非常に大事だ。本当の出発はそういう無でなければいけない。いろいろ考えて、「これなら大丈夫だ」なんていつて出発するのは本当ではない。

どうにもならなくて一步、歩いてみたら、上から光がきて内容的にいろいろ教えてくれたり、道だつたら導いてくれたり、そういう無ということ。禅宗の本当の悟りの世界もうではないですか。いわゆる「悟った」なんていうのは悟りではない。

どうにもならないという時点、自分を本当に投げ出している時点、その無の時点において、我々は何をしたらよいかというと、キリストの中に自分を投げ入れることです。キリストの中に自分を投げ入れる。それは祈りです。祈り入ることです。全身的な祈入です。頭で心で祈っているのではない。身体で祈っている。祈り入るということはそういうこと。

「身体でキリストに自分を投げ入れる」
のが本当の祈りの世界です。

そうすると——「無即無限無量」と私は時々言いますけれども——無限無量的な質のものがやつてくる。自分の考えとはおよそ違った凄いことがはじまる。芸能の世界であろうと、台所の仕事の世界であろうと、書斎の仕事の世界であろうと、人それぞれの現実はいろいろですから、その現実が天的な現実に質的に変わるわけです。

本を読んでも読み方が違つてくる。

「眼光紙背に徹する」

というけれども、正にそうなんです。書いている人以上のことをその中から汲みとつてしまふ。聖書だつてそうですよ。パウロやヨハネやペテロだつて、たてまつる必要はない。聖霊の光で見ていると、パウロやヨハネやペテロの言葉の奥に——意味ではない——あるひとつの響きが聞こえてくる。聖書を読むのではなくて、聖書を聴くんです。解釈ではない。これはどういう意味だなんて、解釈や意味の詮索なんかしているうちは、いつまでたつてもダメです、普通のクリスチヤンは聖霊で読んでいないから。聖霊の光とか智慧とか力とかは凄いものだ。その無の時点が、キリストから与えられた無の世界です。与えられた無ですよ。自我のない世界です。キリストから与えられた無の世界が無限無量に展開していく。だから、

「十字架即聖霊。十字架と聖霊は離すことができない」



と言っているのはそのことです。

●無からの創造

パウロやヨハネやペテロの言葉の奥の世界の響きをつかむ、響きを聴いてしまう。それが本当の靈然たる世界です。キリストはもう一つ凄いんだ、これは誰もまねができない。キリストの世界は神然たる世界です。神さまと一つになつていているから。我々はキリストの中に入つてキリストと一つになつたら凄いことになる。けれども、神然ではない。我々はどこまでも靈然だ。

「葡萄酒が尽きた」

ということが大事なんです。ゼロなんだ。ゼロの世界で力がはたらく。まだ残つていてどうのこうのではない。葡萄酒がなくなつた。けれども、そこですぐキリストは応えない、

「わが時はいまだ來たらず」

と。そして時がきたから、

「水を瓶に満たせ」

とキリストは仰つた。その水が葡萄酒に変わつてしまつた。神さまの創造というものは無、からの創造なんです。

「光あれと言いたまいければ光ありき」

というのは——暗闇なんです、ところが、「光あれ」と言うそのひと自身が光だから——神さま自身が光でなければ、「光あれ」なんて言つたつて光は来やしない。キリストも自分が神さまに占領されてしまつたから、それで動きだした。

「われ何事をも為しあたわず」

が、一切を為すことになつてしまつた。キリストは正直に言つている、

「自分は何もできない。神さまがやつているんだよ。私は道具に過ぎないんだよ」

と。ところが、人間はみな自分をサムシングだと思つてゐる、何かだと思つてゐる。何かではない。何ものでもない。

「^{きいわい}惠福なるかな靈の貧しきもの」

というのがそのことです。

「何ものでも無き者、自分を何ものともしない者。天国はその人のものなり」

ということ。神の支配する世界が天国です。

「その人は神の支配されるところの現実を歩くようになるよ」ということです。

創造は無からの創造です。だから、無を自覚しなければいけない。何ものかと思つたらとんでもない。自覚したつて、これはいわゆる悟りではない。キリストは無を賜つた。この罪びとなる我を、相対的などうにもならない我を、



「そんなものは問題にするな、お前に凄いものをやるぞ」と。無条件にいただけばいい。

「少し勉強すれば聖書がわかるようになる。ギリシア語やヘブライ語が読めればなによりよくわかる」

なんて、何を言っているか、とんでもない。日本語で結構だ。語学が相対的にできるのできかないのということではない。何か少し積み重ねれば聖書はよりよく分かる、という考えが一般に多い。とんでもない。文字なんか読めなくたつていい、聞いていれば。聞いて、そこから受けとるのが本当は一番素晴らしい。

福音の世界は、語るのを聞く世界なんです。あなた方は聖書を読むときに、聖書を読まないで聖書を聞いてくださいよ、特にその響きを聞く。日本語でもギリシア語でもヘブライ語でもない。響きの世界、音楽の世界だ。福音というのは福なる音なんだ。「福音」とはいい言葉だ。音の世界、音楽の世界です。福音は音楽。ベートーベンやシューベルトは魂で天然の声を聞いて作曲していた。福音は音の世界、響きの世界です。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声^{からず}きけば生まれぬ先の父をしそ思う」

これは白隱の句だ。鳥は黒くてなかなか見えない。しかも闇の夜だ。闇の夜に鳥がいるのなんか見えっこない。そういう闇の夜に鳴かぬ鳥の声が聞こえる。そうしたら、生まれぬ先の父がわかるという。ああいう神秘的な境地は凄い。

神秘とは大事なことなんです。神秘の世界をもたなかつたら、本当の世界ではない。本当の福音の真理、聖書の真理は全部、神秘なんです。意味が分かるような世界ではない。意味を詮索するような世界ではない。キリストの言葉自身が神秘なんです。

中世の神秘家のエックハルトというのはそういう神秘の世界を開示した人です。エックハルトというのはえらいやつだった。その弟子のゾイゼ（スーソー）も。それからアッシジのフランチエスコ。凄いね、フランチエスコもどん底の魂だから。

● 十字架・聖靈の場

「^{さいわい}惠福なるかな靈の貧しき者」

という、この一言が実は福音の焦点だ。

「靈が貧しい」

とは「ゼロ」(0)の世界なんだ。ゼロの人間が一番恵福だ、即「無限無量」(∞)だということ。そのゼロを我々は十字架でいただいた。このゼロは罪から完全に贖いとられている。それは十字架だ。そうすると、聖靈がやつてくる。だから私は

「十字架と聖靈は絶対に離してはダメです。離れない関係のものです」

と言っている。聖靈といえばその奥に十字架がある。十字架と言えばその先に聖靈がある。それがキリストの福音の世界です。時々引用するでしょ、ルカ伝12章49節は忘れないでく



ださいよ。

「私は火を地に投ぜんとて來れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」（ルカ12・49～50）

これは

「十字架を通らなければ、聖靈はやらないぞ。十字架を通つたら、凄いものがくるぞ」ということです。キリストのこの言葉は非常に大事な言葉です。

聖靈がくると、普通の現実に平和でなくて剣を投げる。真理か真理でないか、人が分かれてしまふ。相対的なこの世のことで生きている者と、ものの感じかたが違つてくる。絶対的な無の時点、行き詰まつた時点。「どうにかなるか」と思つたら実はそうではない、どうにもならない。我々は「どうにもならない」というのが本当の現実なんです。そこから始まる。

「まだ私はどうにかなりますよ」

ではない。どうにかなつていてるような、そんななりかたは結局消えてしまう。本当の我々の現実はどうにもならないという現実なんです。その絶対的な極限の状況、そこから始まる。ところが本当は、いかなる時も極限の状況なんです。本ものはいつもその時点が本質であることを自覚しなければいけない。そうすると、神さまの創造の力がやつてくる。ものを書いていても、本を読んでいても、何か仕事をしていても、本当の現実はそこがいつも出発点なんです。それが、別な言葉でいうと、十字架・聖靈の場なんです。絶対恩寵の場です。絶対の恩寵の場を自覚すれば、いつなんどきでも楽しい展開がはじまる。

●主さまに圧倒されて生きる者

「カナの婚宴」で私が言いたいことはその一点なんです。「葡萄酒なし」という。そして、水を満たしたところが、その水が葡萄酒になつてしまつた。イエスというひとは大変なひとです。こういう記事をみると、もう参つてしまふね、キリストの前で平伏すよりかしょうがない。ガリラヤ湖の水の上を涉つてくるひとだからね。変化かと思つたら、

「^{へんげ}変化ではない、私だよ」

と。水の上を歩いていたつて水になんか触れてやしない。まあ大変なひとだな全く。誰が水の上を歩けるかというんだ、みな沈んでしまう。ペテロも真似をしようと思つて、ちょっと始めはよかつたけれども、波と風を見たら沈んでしまつた。キリストに持ち上げられた。

「私もあなたの所へ行きます」

と言つて、始めは良かつたんだ。そしたら、波風を見たら沈みかかつた。

「信仰うすき者よ」

と。信するというのは全的な世界だからね、分裂したらもうダメだ。キリストを信ずると



はキリストを受けとることだ。

「キリストの中に自分を投げ入れる」

ことだ。「信ずる」という言葉が躊躇だ。だから、私は、

「信仰なんかありません」

と言う。「自分の信仰」なんてものをサムシングにしたらダメだ。無信だ。

「あなたの信をいただくだけです。本願をいただくだけです」

と、本願に生きる。「本願」とはいい言葉だ。我々は本願に行きなくてはダメです、神の本願、キリストの本願に。我々は本願者、本願に生きる者、主さまに圧倒され、生きる者です。信じているのではない、圧倒されている。被圧倒の存在です。

あなた方、こういうことを聞いて、楽しいですか。楽しくなければダメだよ。

「それは難しい」

なんて、ちょっとも難しくはない。楽しい世界だ。あなた方、本当にキリスト一点張りになつてください。キリスト一点張りになつたら、こんな楽なことはないから。自分の側は何も考えなくていいのだから。ただもう、キリストの中へ自分そのものがあるがまま投げ込んでいけばいい。そうしたら、その一人一人のやることに本当の力が出てくる。本当の創造力が出てくる。創造は、無の現実を与えながら、無限無量のものを展開してくださる。水を満たしたら、葡萄酒になつた。これはキリストを通して創造の力がはたらく。摩訶不可思議です。

「そんなことがあるか」

と、自然科学的に考えたら、そうだよ。お母さんが味噌汁を作りそこなつた。子供が

「神さま、どうぞこのおみをつけを甘くしてください」

と祈つたら、そうなつてしまつた。やりそこなつた味噌汁がおいしくなつて、お母さんはびっくりした。これは信州の小諸で聞いた本当の話です。子供の祈りがそのようにはたらく、水が葡萄酒になつたように。

神の創造の力がはたらくと、水が葡萄酒に変わつてしまつ。こういうところを読んだら、

「本当に参りました。そういうみ力に与かりたいです」

と、キリストの中に自分を投げ入れるんだ。聖書の中に自分を投げ入れる読みかたをしなければダメですよ。分かるの分からぬのという世界ではない。いや、本当に凄いんだ、聖書の現実というのは。人間が書いたどんな思想の本も、どんな哲学の本も、聖書一巻にはかなわない。この現実にはかなわない。キリストというのはそのように神さまの働きを、言葉の上でも業のうえでも展開した方ですから。正に神の子だよな。

「自分は何もできない。みな神さまだよ。何も言えない。神さまが言えという

ことを言つているだけのはなしだよ」



「イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。わが肉をくらひ、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。それわが肉は眞の食物、わが血は眞の飲物なり。わが肉をくらひ、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん』……弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、誰か能く聞き得べき』……活すものは靈なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、靈なり生命なり。」（ヨハネ6・53～63）

とある。聖書を読んで、

「これはどういう意味だ、こんな事があるか」

なんて、そんな気持で読んでいるうちはいつまでたつてもダメだ。研究会で研究なんかしても、いつまでたつても聖書の扉は開かない。我々はそういう聖書の読みかた、聞きかたをしないとね。そうしたら、楽しくてしようがない、力がきてしようがない。

ベートーベンのことを歌つた「視よ此の人ぞ！」（D2 1985/2/28 作詞作曲）という自作の讃美歌がある。（独唱）

- | | | |
|---------|-----------|--------|
| 1 | ああベートーベン！ | 生涯の |
| | 彼の涙を | 誰か知る |
| 「第一の我」 | は | 遂に無し |
| この世は仮りの | | 宿なりし |
| 2 | 音はひびけど | 音の無き |
| | 旅路を独り | 辿りつつ |
| | 森と小川を | 眼にて聴き |
| 3 | 「パストーラル」を | 奏でたり |
| | 見よ此の人ぞ！ | 孤独なる |
| 音の芸術の | | 巨匠なり |
| なやみ苦しみ | | つき貫けて |
| 世に投ぜしは | | 「第九」なり |
| 4 | 孤独なれども | その心 |
| | 力と愛に | みなぎりて |
| | あらゆる人の | 胸をつつ |
| | 音曲の波は | かぎりなし |

私はこういう本ものの人間には感激するんです。

